

氏名	関口 博 巨		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博乙第57号		
学位授与の日付	2018年3月13日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学位論文の題目	近世村落の領域と身分 ―民衆世界の有界化―		
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授 田上 繁
	副査	神奈川大学	教授 佐野 賢治
	副査	神奈川大学	教授 前田 禎彦
	副査	跡見学園女子大学	教授 泉 雅博

【論文内容の要旨】

本論文は、空間や人間関係の分割の仕方は、時代や社会の特質を反映するものであるという前提に立って、近世村落がどのような空間・身分的に編成されていたのかを究明することを目的としている。その場合、村請制村落の編成（有界化）と生活の場であるムラ社会の線引き（仕切り）は、必ずしも一致するものではなく、ムラ社会がどのように有界化され、生活の現場ではそれをどのように仕切り直していたのか、ムラ社会の領域と身分の関係を構造的に描き出そうと意図するものである。

論文の章立て構成は、以下の通りである。

序章 問題の所在と本書の構成

第一部 村の構造と「村」領域一村の仕切り―

第一章 関東の「村」と百姓土地所持

第二章 関東の「村」と村運営

第三章 瀬戸内海における「島村」の形成

第二部 百姓と従属民―身分の仕切り―

第一章 奥能登における「下人」化の諸契機

第二章 奥能登における「下人」の職能と生活

第三章 甲州山村の家抱とその「自立」

第三部 身分社会の越境者―仕切りの透過性―

第一章 ムラの越境者の近世史・素描

第二章 寛政三年の陰陽道騒動

第三章 屋敷墓・持仏堂・道心者

第四章 江戸地廻り経済の展開と近江商人

終章 本書の総括と展望

以上のように、本論文は序章、終章と、三部で構成される本論部分からなっている。

まず、序章においては、本論文の問題の所在と構成が示される。最初にこれまで日本近世史を主導してきた「幕藩制構造論」をはじめ、百姓土地所持と村落共同体、百姓論、中世近世・近世近代の連続と非連続など本論とかかわる先行研究が紹介される。そして、本論文の中心となる社会の有

界化と仕切りの問題の説明へと入っていく。

第一部では、村の仕切りをテーマに、まず、圧倒的な暴力を背景に成立した近世「国家」は、社会・経済諸関係をさまざまな「領域」に「有界化」したが、その代表的な領域が検地で成立した村であると説く。しかし、有界化された村と、その住人たちによって仕切られた「村」は、必ずしも一致するものではなかった。したがって本論文の一つの焦点は、領主の村と生活の「村」（地域によって「耕地」「庭場」「坪」「谷津」などと呼ばれる）のそれぞれの役割を見定め、両者の関係の変移を解き明かすことであった。また本論文では、村や「村」を中核とする在地社会を、ひっくるめてムラと総称し、「ムラの自力」の生命力に注目した。

一村多集落型の関東地域のムラ社会は、〈a 小「村」－b「村」－c 大「村」－d 大「村」団＝組合村〉という重層構造を形成していた。b 層の「村」は百姓個人の訴願を媒介し、「村」の「惣代」「役人」が c 層の村運営を支えた。また、ムラ社会には「村」の土地は「村」のものという意識、百姓個人の所持地にも共同地的性格（私的所持と共同的性格の両立）などがあつた。「村」は日常の濃密なつきあい関係や冠婚葬祭における互助関係の基盤でもあつた。「村」はムラの自力を担う根源ともいえる共同体であつたという。なお、ムラないし「村」のあり方は、地域や身分によってさまざまな形態があつたと主張する。

第二部では、身分の仕切りの問題を取り上げ、十七世紀以降の村では「小農自立」が達成され、小農民の村が幕藩権力の基礎構造をなしたとされるが、有界化された村は、必ずしも小農民のフラットな共同体ではなかつた。地域によっては下人・家抱・名子・被官などと呼ばれる従属民も存在した。この事実により、近世のムラ社会には身分の仕切りも存在した。日本列島の社会では、多数の奴隷労働を使役するプランテーションのような大経営は想定できず、下人を抱えた大百姓の多くは、廻船業・漁業・鉱山業・林業など、海や山などの立地・環境に即応した経営を展開していた。大百姓のイエは企業体ともいべき集団を形成し、地域社会のセーフティネットの役割をも果たしていた。

従属民が百姓身分に「自立」することはあるが、それが農業生産力の上昇による「成長」の結果とは限らない。「自立」とされる事象を検証してみると、百姓身分化の理由が、イエ企業体の経営破綻や不奉公による解雇であるケースが多い。本論文ではこれを、「小経営分立」と捉えた。以上の検討から、下人や家抱などを農業奴隷や農奴と理解し、その存在を直ちに後進地の証明とすることはできない。百姓＝農民論、自然経済から市場経済への発展段階論など、これまでの前提としてきた枠組みを改める必要があるという。

第三部は、仕切りの透過性の問題を追究し、近世の村社会は、領主によって有界化された村請制村落、自らの仕切りとしての「村」、大百姓の「家」を構成する主人一下人関係など、無数に区画されていた。しかし、その区画は鉄壁の厚い壁であつたわけではなく、ムラ社会が存続するために、一定の「透過性」を確保していたと捉える。

例えば、十七世紀の伊東地域には、江戸開府による経済効果を見込んだ多数の西国商人たちが訪れ、やがて百姓として定着していった。十八世紀以降になると、ムラ社会の百姓株も固定し、移住者が成員権を獲得することは困難になっていく。ムラの間隙を往来する越境者たちの相貌にも変化がみられると指摘した。

十八世紀以降、社会問題化した越境者は、宗教者・勸進者・浪人などであつた。彼らがムラに持ち込む信仰・文化・暴力は、「飛上り之心」を抱いた（百姓ではない村人）に影響を及ぼし、ムラの規範や文化を攪乱する要因にもなつた。越境者の中には、広域的なネットワーク共同体を形成した近江商人なども存在した。例えば、武蔵国で醸造業や金融業などを展開した日野商人は、江戸地廻り経済のハブのひとつとして機能した。彼らの経営はネットワーク型共同体「日野大当番仲間」

に支えられ、「よそ者」のまま異郷の地になじみ、出店先の地域経済を牽引したという。彼らの中には、本店所在地の出店先の双方に身分を獲得していた者もいたことを強調する。

ムラ社会の仕切りには透過性があり、多くの移動者が行き来していた。近世の経済と文化の発展は、必ずしも農業生産力の発展の結果ではなく、当初から存在していた仕切りの透過性によっても支えられていたと結論づけた。

【論文審査の結果の要旨】

近年、近世史研究を主導してきた「幕藩制構造論」の理論的枠組みでは説明できない歴史事象が現れてきている。中世から近世に至る時期の社会構造、身分制度、村落構造などの性格をめぐって展開された「太閤検地論争」以後、土地・年貢制度の研究が等閑視されてきたのは否めない。論争後の近世史研究の方向は、共同体論、土地所有論、習俗論、下人論、商人論、社会史など課題を変えながら進んできたが、それは、異なる土俵で論争が繰り広げられているだけで、「幕藩制構造論」が完全に克服されたわけではない。

本論文もこれまで蓄積してきた個別論文では、村落論（共同体論）、土地所有論、下人論、商人論のどこかにひっかかる内容を有しており、一見、一つのテーマに収斂させにくい論文のように思われる。しかし、「ムラの仕切り」と「身分の仕切り」、その「仕切りの透過性」、さらには、「有界化」された「領域」などといった概念で括ることにより、各論文を有機的に結びつけることに成功した。こうした近世社会を研究する上での新しい切り口を見出した点は高く評価される。

第一部の「ムラの仕切り」では、百姓の土地所持をめぐる実証作業を通して、「村」の土地領域的性格、さらには、ムラの仕切りを浮き彫りにしている。また、権力が行う検地によって成立した行政的に区画された村に対し、その内部にある「耕地」「庭場」などと呼ばれる小地域・小集落の存在から、関東とその周辺の地域における「村」と村運営とのかかわり、ムラを媒介とした領主とのかかわりについて、「村」の訴願行為などを通して追究した。加えて、ムラの自力の生命力や重層的な空間編成について論じている。こうした「村」のあり方は、地域や身分によって一様ではなかったと述べ、一村一集落型が多い畿内のムラ、瀬戸内海の「島村」、下人や家抱が集住した場所、被差別民が住まわされた場所の存在を指摘した。

次に、身分の仕切りでは、奥能登時国家の調査で取り組んだ、多数の下人を抱えた大百姓による、廻船業・漁業・林業・鉱山業など海・山の立地・環境に柔軟に対応した「多角的企業家」的な経済活動の様相や、彼らが地域社会に果たしていたセーフティーネットの役割が明らかにされる。これは、近世を通して100名前後の下人を抱えて農業を行う土豪的大地主と規定されて、「後進」的・「停滞」的存在と評価されてきた、生産性の低い奥能登を代表する中世の遺制と位置付けられてきた従来の研究を克服したものとして注目される。また、隷属民の「自立」が生産力の上昇によって「成長」したのではなく、イエ企業体の経営破綻や不奉公による解雇のケースが多いとした。それを「小農民自立」ではなく、「小経営分立」という新説を提起したが、今後さらにこの概念を深化させることで、「小農自立」による本百姓体制の構築と捉える「幕藩制構造論」に異議を唱える論理が生まれてこよう。

最後の仕切りの透過性では、ムラの仕切りと身分の仕切りについて自論を展開する。近世社会は有界化されてはいたが、その仕切りは決して越えられないものではなかったとして、ムラに行き交う勸進・芸能民・陰陽師・道心者などに着目し仕切りの透過性について考察がなされる。その方法はムラを定点として移動者を観察する形をとり、越境者の態様や対応の変化を追跡するものである。

この手法は、人の動きの観察を通して社会全体の動きを把握し、併せて、ムラという場を同時に照射する手立てとなり、その時代性、あるいは、近世という時代を問い直すことができるので有効であった。事実、伊豆国伊東に定点を置いて陰陽師の竹内長門、埼玉郡志多見村の道心者、近江商人などの動向を追跡しており、そのビビットな動きからムラの性格が浮き彫りとなる。

本論文は、各章を構成する論考の実証性の高さとともに、それを基礎にして展開される本論文の内容はきわめてすぐれたものと評価される。とくに、ムラの仕切り、身分の仕切り、有界化された村といった独創的な切り口により、歴史研究に新たな手法を開拓したことは、後続に与える影響も大きいと思われる。

以上により、関口博巨氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することが適切であると審査員一同認めるものである。